

## 「自分の罪に気付かず」 ヨハネによる福音書 8 章 3-11 節

今朝与えられた聖書箇所テーマは、ずばり「裁きとは何か」です。主イエスのもとに、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女性を連れて来ます。彼らは、これでイエスをやっつけることが出来ると、意気揚々としていたのです。私たちが一番覚えておかなければならないのは、律法学者やファリサイ派の人々の姿だと思います。

彼らは、いわゆる正しい人です。自分だけでなく、周囲の人々からも一目置かれる存在です。その正しい人が、女性の罪を公衆の面前で裁いている、さぞ正しい人々は気持ち良かったことでしょう。人を責める時、私たちは、自分こそ正しい人であり、人を見下し、ある種の満足感を持っていきます。しかし、その姿がどんなに醜いものであるか、聖書は私たちに教えるのです。この箇所を読んで、律法学者たちやファリサイ派の人々の姿を美しいと思う人は一人もいないでしょう。しかし、自分のことは棚に上げて人のことを責め立てる姿こそ、私たちが、日常で意識もせずに行ってしまうことなのです。今年は特にコロナウィルスの影響により、人々の醜さが浮き彫りになっています。「これこそが正しい」と他者をさげすみ差別し、自分が優位であろうとする。しかし、自分はそんなに偉そうなことを言える者なのでしょうか。我が身を振り返る時、とても恥ずかしく思うのです。

イエスを貶めるため「あなたは、どう考えるのか」と、正しい人々は言いました。主イエスが「ゆるしなさい」と言っても、「殺しなさい」と言っても、正しい人々はどちらの答えでもイエスを訴える気だったのです。すると主イエスは、指で地面に何か書き始められました。そして「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」とだけ言われたのです。すると、誰も石を投げずに立ち去ってしまいました。

この女性は確かに死罪に当たる罪を犯しました。しかし、この女性を裁くことが出来る者は誰か。罪を犯したことのない者しかいないではないか。この女性と同じように罪を犯しているのに、この女性を裁くことが出来るのか。あなたがたの誰が、自分は罪を犯していないと言えるのか。単に現場を押さえられていないだけではないのか。主イエスは、そう告げられたのです。この世の基準で言えば、律法学者たちやファリサイ派の人々は正しい人であり、この女性は罪人です。しかし、神様の御前においては、この女性も律法学者たちやファリサイ派の人々も、同じように罪人です。そしてまた、私たちも同じ罪びとです。みんなが立ち去った後、この女性は主イエスと二人きりになりました。そして、主イエスのこの言葉に与り、悔い改めて新しい命に生きることとなった。この主イエスの言葉を受けるためには、どうしても主イエスと二人きりにならなければならないのです。そこでしか、悔い改めは起きないのです。キリスト者とは、この主イエスとの二人きりの時を持った人のことです。自らの罪を認め、主イエスの御前に悔い改めた人のことなのです。礼拝を守りこの主イエスの言葉を受ける私たちは、今までの歩みと決別しなさい。自らを正しい者として、人を見下げて、人を裁いていい気になるような歩みと決別しなさい。そして、悲しむ者と共に涙し、喜ぶ者と共に喜ぶものになりなさい、と聖書の言葉を心に留めましょう。